

建築物の地域性にどう対応するかがポイント

復旧と共に生産力・対応力の強化を図る

江間忠ウッドベース鹿島株



東日本大震災による地盤の液状化で工場に壊滅的な打撃を受けた江間忠ウッドベース鹿島株。しかし、震災被害からの復旧に際して、様々な加工機メーカーの機械設備やCADシステムの導入、レイアウトの変更などを行い工場の再編成を続けてきた。

同社の工場を訪れたのは2014年の11月上旬。加工機の新規導入と工場建屋の刷新は同年10月から行われていたが、生産能力が安定し、本格稼動に移行した竣工から約1ヶ月が経ったところに取材を行った。

同社は工場から半径100km以内の商圈確保と、地域の工務店やビルダーに向けた対応をするため、規格化された材の生産量を増やすのではなく、加工できる材形を増やすことを工場のコンセプトとしている。そ

のため、これまで使われてきた既存の加工機は在来工法のみに対応させたラインとし、新規導入した宮川工機製の加工機は在来工法と金物工法の併用ラインとして運用している。また、工場に隣接するオフィス棟も新設されている。建物の柱・梁・内外装・カウンター・テーブルなどに同社で加工された国産材・輸入材を使用し、同社のオリジナル商品に触れることができる。

復旧に際しては地域性への対応を強化

江間忠ウッドベース鹿島株の北里剛取締役はこの工場について「被災時は工場の復旧を最優先としていましたが、その段階から材料の使い方やグレード、納ま



工場に隣接するオフィス棟



新工場のストックヤード奥に見えるのが旧工場